

2021. 7. 11. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書 18章 35-43節
『孤独の持つ豊かさ』

ルーマー・ゴッデンの「ねずみ女房」(石井桃子訳・福音館書店)という児童文学があります。よくあるねずみの冒険譚とは異質の、次のような話です。

ある屋敷の屋根裏にねずみの夫婦がいました。夫は朝から晩まで一日中食べ物のことばかり考えていました。でもねずみ女房はいつも「何か足りない」と思えてなりませんでした。あるとき夫がケーキの食べ過ぎで寝込んでしまいました。女房は夫の分の餌を探しに各部屋を廻りました。そこである部屋で宮殿のように立派な鳥かごに入れられた鳩と出会うのです。そこには豆やベーコンが用意されていました。それを女房は失敬していましたが、鳩のもとに通ううちにいつも餌がまったく食べられていないのに気付きました。鳩に豆を差し出して見ても見向きもしないのです。鳩は「わたしは露だけ飲む」と言いました。ねずみ女房は露とはなにか分かりませんでした。でもそれから毎晩、ねずみ女房は鳩と話をするようになりました。鳩は人間に捕まえられる前の、森の中での暮らしをぽつりぽつりと話してくれました。それはねずみ女房のまったく知らない世界でした。深い闇に閉ざされた静かな森の夜。そして朝の光に照らされて輝く木々の朝露。その露を一口飲んで、澄みきった青空に飛び立つこと。頬を打つ流れる風の心地よさ、天空から眺める眼下の森……。ねずみ女房は飛ぶこと、空のことを聞かされて体がぶるぶると震えるほど心の奥底から揺り動かされました。けれども毎晩鳩のもとに通うねずみ女房の夫はとても不愉快でした。「なぜ食べ物のことだけを考えてられないんだ」といって怒って噛みつきます。やがてねずみ女房にたくさんの子どもが生まれてその世話に明け暮れます。夫は怒るし、仕事は一杯。毎日が忙しくクタクタになったある晩、夫の留守にねずみ女房は鳩に会いに行きました。しかしそこには以前のような毅然とした鳩の姿ではなく、みすぼらしく痩せ衰えた姿に変わっていました。しかし、鳩は静かにねずみ女房を抱きしめてくれました。その時、ねずみ女房は気付きました。「鳩はこんなところでは生きていけない」と。彼女は必死で頑丈な鳥かごをこじあけて鳩を逃がしてやりました。鳩は月夜に照らされて静かに、そして高く高く空に消えてゆきました。ねずみ女房は初めて分かったのです。「あれが飛ぶということだったんだ……。」

本日の聖書の箇所、大勢いた群衆の中で主イエスに出会ったのは目の不自由な人ただひとりだけでした。彼は周りから叱りつけられても叫び続けます。彼の人生は文字通り暗闇を手探りで歩む孤独なものだったと思います。しかし、孤独とはただ単に忌み嫌われるものなんかではなく、人間が自分の内側を見つめ、本当の自分自身を発見するために欠かすことの出来ないものであり、人間はひとりで悩み、考える時があってこそ初めて成長するということをルカは人々に提案してゆくのです。神の前においては、人間はどんなに誇るべきことも、ただむなしくされるのです。そして、頼るべきものがない裸の自分、孤独な自分にされるというのです。でも、人間が本当の自分を持って生きるためには、本当の自分を発見するためには、そして逞しく、希望ある生活をするためには、毎日の生活の中に孤独な時がなくてはならないのです。人間を裸にし、むなしくする神との出会いが必要です。